

やぶれ傘



九十八号

二〇一七年十月

箱庭の釣竿に糸なかりけり 根橋宏次

鬼やんま羽を合はせて掴まへる きくちさみえ

荒れ畑に丸太ひと山草の花 大島英昭

朝顔のフェンス一面しかも紺 丑久保 融

自転車を押して人ゆく草の花 廣瀬雅男

夏終はるとこの礎だかひとつある 青谷小枝

白芙蓉咲く球場の裏ゲート 瀬島酒望

ペランルをくるくるまはし待ちあはせ 天野美登里

山装を下りて来る風くさひぼり 藤井美晴

雨あがり畑の棒にとんぼゐる 白石正純

交番へ出前の届く秋の昼 安藤久美子

犬が大見てゐて秋の蝉の声 小山陽子

ゴムボート浜に掲げられ花火鳴る 渡邊孝彦

新涼やのど越し帷き白ワイン 菊池洋子

二百十日めらめら燃えるベニヤ板 有賀昌子

抄 集 句 傘 紀 大 崎 ぶ や

クーラーの効きはどうかと子のメール 秋山信行

抱かれて足をくにゆくにゆ水遊び 松村光典

南瓜炊く使ひ古しの落し蓋 石塚清文

新駅のガラスに写る夏の雲 泉 一九

サングラス表通りに出でてから 木村瑞枝

行く夏の雲の流れの早さかな 黒木東吾

竹筒の香りほのかに水羊羹 齋藤朋子

園草の青を主役に描き終へて 津崎志津子

炎熱の外を見ている喫茶店 高橋 均

炎昼を重き宅配便届く 萩原久代

風通すただそれだけの夏座敷 武藤節子

夏の朝庭の果箱でチチチ子と 森美佐子

戦場ヶ原の木道岩 清水 山本久枝

踊りの輪そつと外れてきたりけり 浅嶋 肇

夜学子の机に伏してそのまんま 安斉正蔵

きちきち

安藤久美子

ケチャップをかけてオムレッツ蟬時雨  
自転車のサドルを濡らす白雨かな  
遠雷の音が近づき来る気配  
きちきちの眺び交ふ道を旧家まで  
外湯へと秋雨少し来てゐたり  
交番へ出前の届く秋の昼  
御鞆を取り換へてゐる秋日和  
ホチキスをカシヤリと使ふ秋灯下  
三匹の秋の金魚の欠伸かな  
これもまた読み止しとなる月今宵

秋の蟬

小山陽子

靴紐のすぐに解ける溽暑かな  
神輿通ればとりあへず開ける窓  
台風の夜へたうたう走り出づ  
秋の初風公園に犬の来る  
ラーメンに鳴門の浮かぶ秋の夜  
秋暑し玉子サンドをもぐもぐと  
秋の夜に出すぎてしまふ齒磨き粉  
犬が犬見てゐて秋の蟬の声  
そぞろ寒肘のたるみに触りゐて  
パン買ひに出れば通りは秋祭

秋  
蟬

渡邊孝彦

樟若葉幅ある礎の端を行き  
堀越しに見る起重機や油蟬  
ゴムボート浜に揚げられ花火鳴る  
マンシヨンの空の静かさ夜の秋  
潮騒の中に人ごゑ夏の果  
溝川の安全柵に藪枯らし  
日曜の邑の暮れ行く稲の秋  
雨上がり秋蟬朝の木に鳴いて  
一茎の狗尾草ゑのこ道に捨てられて  
三塁側フェンスの外に秋桜

新涼

菊池洋子

保育園の空き地にへくそかづらかな  
源泉のにほひ漂ふ登山口  
雲の峰シュシュッと放つ散水機  
踊りの輪そつと抜けくる母卒寿  
豆腐屋の手のひら白く涼新た  
新涼やのど越し軽き白ワイン  
をなもみをどこでつけたか戻りくる  
山宿の瓶に一本水引草  
こぶりなるものもしつらへ茄子の馬  
ゐるはずのひとのゐなくて鉦叩

二百十日

有賀昌子

蝸の次のこゑ待ち米を研ぐ  
すぐそこに風がきてをり秋桜  
秋の夜のさそり座の尾の見当たらず  
夏月山弥陀ヶ原鶯の谷渡りきく八合目  
走り根のごちやごちや道や夏の山  
沼尻に見つけ継子の尻ぬぐひ  
みんなんのひとつが鳴いてそれつきり  
火気厳禁の倉庫へと大西日  
夏祓帰りの磴を踏みはづし  
二百十日めらめら燃えるベニヤ板

クーラー

秋山信行

肩車して宵宮をひと巡り  
クーラーの効きはどうかと子のメール  
幼子の覗き込みぬる蟬の穴  
はらからと泥鰌を食らふ年回忌  
土の手に汗ふく術もなく畑  
明易の夢は途中で終はりけり  
放たれて蟹は渚を奔りゆく  
居酒屋の格子より入る晩夏光  
秋めくや頬に指おく半跏像  
大の字にやんちゃの眠るつくつくし



水遊び

松村光典

抱かれて足をくにゆくにゆ水遊び  
深呼吸してより木下闇を出づ  
蟬の穴日増しに増える木のまはり  
わが庭にひまはりひとつ咲きにけり  
夏野菜あれこれ揃へバーベキュー  
秋の陽の輝く朝となりにけり  
秋の日の葉袋の重さかな  
台風一過庭広びろとなりにけり  
ガラス戸の向こうに秋の蚊のとまり  
秋の風オペラシテイの赤ワイン

鳳仙の蟬はじける音のしたやうな  
 秋の蟬子の宿題はまた半ば  
 夕暮れて時惜しむごと秋の蟬  
 南瓜炊く使ひ古しの落し蓋  
 大仏の顔に西日の高徳院  
 朝練をそつと見守る夏帽子  
 どことなく母の面影雲の峰

石塚清文

雨上がりにひとすぢ蜘蛛の糸  
 とうすみは羽で拜んでつぎの花  
 中干しの田面は乾き稗の伸び  
 むら映える棚田の畦の彼岸花  
 雨山路横にひそかに蕎麦の花  
 行き交ふは杖か白髪墓参り  
 そそくさと鳴いて飛び立つ秋の蟬

石原健二

たこ糸で水鉄砲の芯を巻く  
山路へついとつき出す百合の花  
本堂の灯明ゆゆる蟬時雨  
新駅のガラスに写る夏の雲  
螻蛄鳴く夜過ぎす術なく経を読む  
夕イヤ無き空き地の廃車蚯蚓鳴く  
菫の花をおひたしにして酒を汲む

伊藤 更正

高山のまつりの夜の涼しさよ  
仰向けに蟬の骸はころがつて  
川岸の杭にとまれり糸とんぼ  
我が肩にじつととまつて秋あかね  
手術特別養護老人ホーム後の傷跡うづきぬる残暑  
特養の庭でひぐらし鳴きかはす  
提灯を連なり吊し盆踊り

稲田延子

父と子のキャッチボールやねむの花  
浴衣着てなかなかはけぬ緒のきつさ  
女の愚痴聞いて合の手夜の秋  
かなかなに負けじと吠ゆる門の犬  
やつと来た不老不死の湯浜の秋  
盆帰省うれしきものに伊予なまり  
客帰り今日のかたづけ十三夜

岩藤礼子

八月は亡き人の月花あふれ  
つくつくしボール蹴る子ら代替り  
シダ茂る恐竜の裔潜ませ  
かなぶんにどんな一夜がその骸  
枝先まで葉を食ひ尽くし青虫は  
遠かなかな以前聞きしも通夜の席  
落蟬に自転車列乱れけり

枝みや子

真夜中の蚊の音耳に頬叩く  
土砂降りの後に暑さは和らいで  
突然の雷に逃げ込むガード下  
早朝のブロック塀で蟬の羽化  
蓮の葉の水玉池に転げ落ち  
筋トレの後の体に秋の風  
胡弓の音聞こゆる秋の夕べかな

大野芳久

子のくれし白シャツ値札付きしまま  
拍子木が打ち鳴らされて山車が発つ  
病院を出でて聴き分く蟬の声  
大の字に寝転ぶ畳青すだれ  
塀越しの無花果熟れて長話し  
樹に戻す脱皮まぢかの残り蟬  
亀泳ぐ池にさざ波鴨来る